

ジェミニの方舟

高嶋哲夫

第一章 荒川

1

背後から軽快なジョギングの足音が近づいてくる。

振り向いた玉城孝彦は目を細めた。陽はかなり傾いているが、九月としては強い陽光が目の奥に射し込んだ。

深く息を吸い込むと、熱で膨らんだ草の香りが肺に満ちる。

玉城は言葉を探しながら、そつと横を見た。隣には小学四年生の長男、大輔が目を閉じて座っている。眠っているようにも見えるが、ときおり脛が震えるように動く。どちらかといえば丸顔の玉城と違って、端正な面長の顔だ。色白なのも妻に似たのか。

大輔が目を開けて眩しそうに瞬きした。

「前に来たのはいつだったかな」

「ええっと……夏休みの終わりごろ」

気のない返事が玉城の氣勢を削ぎ、次の言葉が見つからない。

うちでごろごろしている大輔をなんとか連れ出したものの、会話の糸口がつかめない。メールでは週に二、三回、短いながらもやり取りをしている。家族、そして同居している玉城の母親への伝言が主だが、最近の小学生と父親とのやり取りはこんなものか、と思っ

「天体望遠鏡は見てるの？」

去年のクリスマスに買ってやったものだ。

「たまにね」

興味なさそうな声と表情だ。父さんは欲しくても買ってもらえなかったと、喉元まで出かかった言葉を玉城は飲み込んだ。いつも、時代が違うんだと自分に言い聞かせている。

目の前には広大な芝生の土手と河川敷が続き、その先には、ゆったりした川の流れが丈の高い雑草の切れ目から見える。荒川だ。

子供の頃、この河川敷でよく父親と遊んでいた。母親にはそう聞かされているが、玉城には鮮明な記憶はない。ただ、この土手に来るとぼんやりと心に浮かぶ光景がある。おだやかな川の流れ、広い河川敷、白髪混じりの髭の老人と犬、大きな男、そして高い笑い声。

玉城は脳裏に浮かんだ光景を振り払い、大輔に語りかけた。

「荒川は日本で最も人口密度の高い地域を流れる一級河川で、何度も氾濫を繰り返している。この川の堤防が切れると、銀座や東京駅のほうまで水浸しになる恐れがあるんだ。だから……」

「江戸時代から治水事業が行われている。その一つとして、全長二十二キロメートル、幅五百メートルに及ぶ荒川放水路が造られた。そして、旧荒川は隅田川と呼ばれている。学校で習ったよ」

玉城に代わって、大輔が続けた。

玉城は大輔の頭に手を載せた。身長はクラスで一番後ろ。この調子で伸びれば、六年生になるころには玉城と並ぶことになる。しかし、体育はいつも「がんばろう」。体格と運動神経は別ものだという見本だ。親の目で見ても動きはのろく、ワンテンポ遅れて行動が始まる。

「お兄ちゃんのあだ名、ドンキーなのよ」

そう教えてくれたのは由香里だ。まだ六歳になったばかりだが、さすがに良くないあだ名だと感じているらしく、玉城の耳元で囁いた。

「なんていう意味なの？」

「かわいい動物だ。ポニーのような。でも、お兄ちゃんには言うんじゃないぞ。ママにも

だ」

「どうして？」

「どうしてもだ」

玉城にしては、珍しく強い口調になった。由香里は一瞬、戸惑った表情を見せたが、何も言わず部屋を出て行った。

一年以上前の話だ。それから数ヵ月後の三年生の三学期、大輔にはランドセルを背負って玄関で靴を履くと、決まって頭が痛くなる時期があった。

妻の恵子出勤前の忙しい時間で、玉城が学校に体調不良で休みますとの電話をすると痛みは消える。恵子は仮病だと決め付けたが、玉城はありうろと思っていた。

玉城の場合は腹だった。やはり小学三年生のときで、靴のままトイレに駆け込んだこともある。

「いじめられているのか」と、何気なく聞いたが、大輔は「そんなことない」と答えた。

一週間ほど同じことを繰り返して、春休みに入った。四月に入り四年生になると、学校にだけは休まず行くようになった。クラスメートが代わったからか、担任が代わったからか、玉城には分からない。気にはなっていたが、どうしようもなかった。しかし「理科と社会の知識は驚くほど豊富です」という夏休み前の父親参観での女性教師の言葉は、強く玉城の心に残っている。

九月最後の日曜日である。ふと玉城は時計に目をやった。午後四時四十分。

川に沿って海から吹き抜けてくる熱を帯びた生ぬるい風が、体をなめていく。

対岸から歓声が聞こえる。少年野球のチームが試合をやっているのだ。

「野球はしないのか。バットもグローブも持ってたよな」

「うちでゲームをやってたほうが面白い」

「母さんはなにも言わないのか」

「由香里のやつが言いつけなきや分かりっこないさ。見つかっても、叱られるのには慣れるし。それに最近、母さん、うちにはあまりいない」

「仕事……だろうな」

「最近は休みの日も、仕事、仕事。予定が遅れてるし、使っている業者がいい加減で、信用ならないんだって。いらいらしてるの分かるでしょう」

大輔は何気ない口調で言うが、かなり気にしているようだ。

玉城には答えられない。恵子とは電話で話してはいるが、ここひと月会っていない。

「いい天気だなー」

玉城は空を見上げた。青い空に、普通夕方には消える積雲が数個浮かんでいる。絵に描いたような秋空だが、大気はまだ夏を引きずっていた。木陰にいてもじっとりと汗ばんでくる。

「でも九州じゃ、今、雨が降ってるんでしょ？」

「へえー、よく知ってるんだなあ」

「父さんが言ったんじゃない。大陸の湿った低気圧が九州に近づいてるって。天気は西から変わるから、明日の明け方には東京も雨なんだよね」

「当たってる。どこで習った？」

「テレビの天気予報を見てたら分かるよ。それに、台風23号も生まれているし」

「誰が言ってた？」

「今朝の天気予報。それに、父さんも」

「そう、だったな」

玉城が天気図に興味を持ったのは、小学校四年のときだ。夏休みの理科の宿題に、ひと夏分の新聞の天気図を切り抜いて画用紙に貼り付けた。ただそれだけのもので、クラス中が馬鹿にしたが、玉城には見えていると夏休み中の天気図が頭の中を流れていく、魔法の地図に思えた。

「そろそろ行くか。父さんも静岡に帰らなきゃ」

帰る、という言葉が自然に出た。数カ月前までは行くという言葉を使っていたはずだ。

玉城は先週、三十四歳になった。東都大学理学部地球物理学科の講師だが、去年の十二月から静岡県、牧の原にある『日本防災研究センター』に出走している。防災学会で、玉

城の発表を聞いたセンター長から話があった。教授に相談した結果、四ヵ月後には出向の辞令が下りていた。

専門は気象、特に台風を中心に研究している。スーパーコンピュータを使つての台風の発生メカニズム、成長プロセスの基礎研究、そして進路予想をする気象シミュレーションだ。

玉城は立ち上がって、荒川のほうを眺めた。

兩岸の間の距離は五百メートルあまり。両側に広い河川敷が続き、球技のグラウンドやゴルフ場になっているところもある。現在、川はその真ん中を約百五十メートルの幅で流れている。

玉城は大輔と並んで土手の上を歩いた。対岸に広がる町並みが見渡せた。中小の工場、商店街、住宅地……。この辺りは海拔ゼロメートル地帯で、町は川の流れよりも低い位置に広がっている。小学校に入るまで、川は地面より高いところを流れるものだと信じていた。

「たしかに危ないよな」

呟いてから、玉城は苦笑した。他人事ではないはずだ。

土手に沿って建つマンションの二階部分が、ちょうど土手と同じ高さにあたる。大雨の後には川の水量が増し、河川敷に溢れて土手近くまで濁流が渦巻くこともある。いつもより

水かさが増して見えるのは、八月に頻繁に日本を通りすぎた台風と集中豪雨がまだ影響しているのか。「台風23号も生まれてるし」という大輔の言葉が脳裏をかすめた。

東京湾の方向に三棟の建物が霞んでいる。建設中の超高層マンション、リバーサイド・ビュード。

河川敷から土手に、泥まみれの野球のユニホームを着た数人の小学生が上がってくる。手にはバットやグローブを持ち、声高に話し、笑いあいながらすれ違っていく。大輔はそれとなく視線を外し、玉城に身体を寄せてくる。玉城は大輔の肩に手を置いて引き寄せた。陽が沈みかけている。赤い光が町を覆い、血を流したようだ。瞳の中に滲んできそうで、思わず目を閉じた。

家に帰ると、由香里がソファーに寝そべって、テレビアニメを見ていた。

「ママはまだか」

「仕事、トラブっているんだって。電話があった」

由香里がテレビに目を向けたまま答えた。

幼稚園の年長組だが、最近、妙に大人びた言葉を使って玉城を驚かせる。

「恵子さんは一時間ほど遅れるらしいわ」

キッチンから玉城の母、秀代の声が聞こえる。

由香里が生まれるとき手伝いに来て、そのまま子供たちの面倒をみることになった。二十五年前に夫を亡くし、女手一つで玉城と八つ下の弟を育て上げた。この春に五十九歳になったが、四十代前半から髪を染めているのを玉城は知っている。やはり、並みの苦労ではなかったのだ。

玉城は、「どうせ一人で住んでるのだから、お願いしてよ」という恵子の言葉をそのまま伝えた。

「孫の面倒を押し付けられるのは御免よ」と、同居の申し出は即座に断られた。

「恵子がどうしても、頼んでいる」と、玉城が頭を下げると、恵子の両親の了解を取るといふ条件で、ようやく領いた。恵子にはその言葉を伝えたが、実際に話したかどうか玉城は確かめていない。当時は、一日でも早い職場復帰しか頭になかったようだ。

秀代は勤めていた弁当屋を辞めて、玉城のマンションに通うようになった。ひと月たつて、恵子が本格的に仕事に戻ってからは、泊まらざるを得ない日が多くなった。それと同時に、恵子はさり気なく自分の仕事部屋を秀代のために空けた。

恵子は、大手建設会社オーシャン建設に勤務する一級建築士だ。

玉城より一歳年上で、玉城が大学院博士課程に進学した年に結婚した。いわゆるできちゃった結婚で、恵子から妊娠を告げられたときにはすでに六カ月目に入っていた。その日のうちに結婚を決めて、翌週には婚姻届を出した。女性に対してまったくの奥手と見られ

ていた玉城は、意外な目で見られた。

一年浪人して同じ大学に入った恵子とは同学年だった。恵子の研究室は玉城の研究室の下にあり、卒論の防水実験で水が漏れて、謝罪と修理に行ったのが玉城だった。増えていたとはいえ、理工学部の女子学生は二割に満たず、何ごとにも積極的で、容姿服装も派手な恵子は目立つ存在だった。

最初のデートは恵子が誘った。その後も、ほとんど恵子のペースで進んでいる。

二人が付き合い始めたとき友人たちは信じられないという顔をしたが、一番驚いたのは玉城自身だった。

「どうして僕だったんだい」

結婚した翌年、機嫌のいいときに聞いたことがある。恵子はしばらく考えてから口を開いた。

「台風の目」

どういう意味か聞いたが、後は笑って答えない。

当時の恵子の交友関係については、色々言われていた。半分はやっかみであることは分かっていたが、過去の妊娠についての噂は、今も玉城の脳裏にふっと現われ、憂鬱な思いに引き込んでいく。

問題は生活だった。玉城は月十二万円あまりの奨学金をもらっていた。不足分はアルバ

イトをするつもりだったが、恵子の実家が援助を申し出た。

今から考えると、将来大学に残るつもりで玉城は大切に期待されていたのだ。しかしいまだに講師で、上はつかえている。教授と折り合いが悪いというわけではないが、何ごとにも一歩引いてしまう玉城は置いていかれる傾向にあった。

恵子は現在、荒川緑地総合開発の一環として、スーパー堤防に建設中の超高層マンション、リバーサイド・ビューに設計、建設の副主任として取り組んでいる。約五千平米の敷地に、四十二階建ての高層マンション三棟を建設するのだ。一棟の部屋数は四百五十戸前後、総工費八百億円を超える大型プロジェクトだ。

初めての大事な仕事で、玉城が心配になるほど入れ込んでいる。着工前には数日間会社に泊まり込んだことも、最近になって知った。八割がたできた現在は、グループ会社の建築主からの要求が一貫していないことと、思い付きのような設計変更が多すぎると、玉城と顔を合わすたびに文句を言っている。

「やめてよ、お兄ちゃん」

由香里の半泣きの声で我に返った。

「……突然襲った鉄砲水は、民家を飲み込み押し流していききました。さらに、九州南部には土砂崩れが頻発し、少なくとも三十軒以上の住宅が土砂に埋まり、判明している死者は八人、行方不明の方々は……」

テレビには、激しく降りしきる雨の中に、崩れた山の斜面にわずかに屋根を出した数軒の家が映っている。その間をぬうようにして泥水が流れていく。周りには、消防と自衛隊の隊員が必死に搜索している姿があった。

「しっかりと見てなきや、おまえも土の中に埋まっちゃうぞ」

【続きは書籍・文庫にてお楽しみ下さい】

◎ 注意

本作品の全部、または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をすると著作権法、その他関連法によって処罰されます。